

結果的に生まれたファシズム

近代日本150年をどのように見るか、あるいはこの150年をいかなる史観で俯瞰（ふかん）するか。このところ講演でしばしばこのようなテーマを取り上げる。時代の軸が微妙に動いているだけに、大局的な見方を試みたいと思うからだ。

この150年の始まりを、私は1867（慶応3）年の王政復古に求め、このときから現代までの期間をまずは区切ってみる。常識的にいえば、1945（昭和20）年8月15日で切り取って、軍事の80年、非軍事の70年という言い方ができる。軍事の失敗に懲りて正反対の非軍事の道を模索したとの見方である。あるいは40年周期の尺度で、王政復古、日露戦争終戦（1905年）、太平洋戦争終戦（45年）、そしてプラザ合意（85年）などを節とみて確かめるという手法もある。

しかしあえて私は、ドラマトゥルギーの手法を利用して「起承転結」でこの150年を考えてみたい。今の時代で止めて、これだけの期間を舞台として捉え、そこでどのようなドラマが演じられたか見るのである。あえて起承転結を次のように分けてみたい。

起（王政復古から日露戦争開戦まで）

承（日露戦争終戦から37年の日中戦争直前まで）

転（37年から72年の日中共同声明まで）

結（73年から2016年の現在まで）

起は37年間、承は32年間、転は35年間、結は43年間ということになる。起は富国強兵のもと日清戦争に勝利するも「三国干渉」を受け、軍事の方向をより徹底していく期間とっていいだろう。承は満州に獲得した権益を点から線、満州国建国といった面まで広げた期間である。そして転は日中戦争に入り、それが因となり太平洋戦争にと進んだ期間、結局は中国との間で国交回復が実現していく時間と考えていいであろう。

結は戦後民主主義体制の安定期、そして現在の混迷期と続く道筋である。

150年をこのように分けて解説したところ、すぐに二つの反論を聞かされた。ひとつはやはり近代日本は、「昭和20年8月15日」で切らなければおかしいとの論。もうひとつは、これでは安倍晋三首相のいう「戦後レジームからの脱却」と軌を一にするのではないかといった見方である。この二つを聞きながら、私たちは「思考の定型化」に陥っているとの実感を持った。

太平洋戦争が終結したことで、日本はまったく生まれ変わったのか。たとえば軍事独裁から民主主義へと変わったと断言できるか。日本社会は、太平洋戦争に敗れてアメリカなどの占領を受け入れて、表面上の形態は変わったように見えるが、日本人の意識はそう変わっていないように思える。軍人恩給の内幕を検証したり、戦争は嫌だというその心理の底に、嫌戦、えん戦はあるにしても非戦はないことに気づくはずである。

昭和前期に暴力化した統帥権干犯は、あるいは戦争を決定した大本営政府連絡会議などは、大日本帝国憲法のどこにも書いていない。この憲法は昭和に入って死んだ状態だったのだ。軍人の中には、統帥権干犯で政府を黙らせるなら1931（昭和6）年の前後で憲法改正を行うべきだと考えた者もいる。もとより私は大日本帝国憲法容認派ではないが、こと軍事に関してこの憲法は死んでいたと考える以外にない。

安倍首相のいう「戦後レジームからの脱却」は、つまり戦前のシステムへのノスタルジーと戦争犯罪の枠組みに含まれたA級戦犯や戦犯容疑者の復権を目指す意味合いが強い。私の説く「転」とは、日中戦争によって日本はつまづき、結局中国を代表するとされた現在の同国政府との国交回復に35年を要したとの意味である。近代日本の失敗は大陸政策に端を発し、やがて米国、英国などの民主主義体制への批判と至り、そして自滅したということだろう。

私の俯瞰する起承転結では、日本社会と日本人の性格は、状況が変わったにせよそれほど大きな変化は遂

げていない。近代日本に関わる折々の日本人の手記や回想録を読んで、私はそのような感想を持つに至った。なぜ太平洋戦争の呼称が違うのかという疑問、昭和前期のファシズム体制への自省の欠如、ゆがみ、そういった点を確認しているうちに、私はあることに気づいた。

ドイツやイタリアのように指導者が思想をもってファシズム体制を作ったのではない。日本社会では個々人が真面目に自らの持ち場で懸命に働く。そうしてできあがったのが軍事に都合のいいファシズム体制だった。結果的にそうなったのだ。私の言う起承転結は、理念がないが故に成り立つように思うのだ。